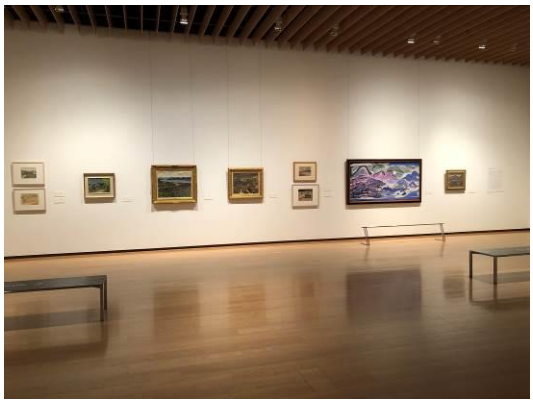
長崎県美術館

長崎開港 450 周年記念　長崎港をめぐる物語

開催期間：2021 年４月９日（金）～2021 年9月 12 日（日）



【企画展の内容・目的】

■長崎港が開港 450 周年を迎えることを記念し、美術の側面から、長崎において港や海が果たしてきた歴史的・文化的意義を明らかにするとともに、その機能や魅力について理解を深める契機を創出する。

■長崎における海や港については、近世における出島に焦点があてられることが多いが、近代以降に描かれた長崎の港・海を主題とした絵画作品及び、海を介してもたらされた砂糖が育んだ菓子文化を紹介するための木製菓子型を展示し、現在に至るまで海や港が長崎の歴史や文化に深く結びついていることを実感してもらうきっかけとする。

■アーティストと共同して行うアートプロジェクトを実施するなど、単に歴史的な側面を学習するのみならず、現在や未来に向けて、身近な海や港に対する新たな視点の獲得を促す。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

１．企画展示の内容

本展示：長崎開港 450 周年記念　長崎港をめぐる物語

■開催期間：2021 年４月７日（水）～2021 年６月 13 日（日）

■開催場所：長崎県美術館　常設展示室　第１・２室

■入場者数：　4,331　人

長崎県美術館　外観

企画展会場　入口

コーナー①「港のすがた」
長崎において「港」あるいは「海」というと、海外との有数の窓口として独自の位置にあった出島及び江戸時代のものをイメージされる場合が多い。一方で、実際には明治時代以降も現代に至るまで、長崎港は長崎の歴史的・文化的営みの中心として機能を果たしていた。
　そこで本コーナーでは、明治期以降現代に至るまでに制作された、長崎港をモティーフとした絵画作品を一堂に展示することで、長崎港が近代以降も、その役割を変化させながらも長崎の町の歩みにおいて重要な存在であり続けたことを、作品を通して理解してもらうことを企図した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

「港のすがた」前半では、明治期後半から昭和 10 年代終わりまでの作品を展示した。この時期、長崎港をモティーフとした絵画作品で現存するものはかなり少ない。その大きな要因として、この時期の長崎港が日本にとって最重要の軍事拠点のひとつであり、要塞地帯法によって要塞司令官の許可がない状態での模写・測量・撮影等が禁じられていたことが挙げられる。海外交流など、華やかで開かれたイメージのある長崎の海や港が、この時期は体制のなかで軍事的な場所として機能を果たしていたことを、数少ない作品を通して考えてもらう契機とした。

事実、一部の作品には検閲印を押されたものもあり、画家たちが課された制限のなかでいかにして長崎港を描こうとしたか、その痕跡を作品から看取してもらえるようつとめた。

つづく「港のすがた」後半では、戦後に描かれた長崎港をモティーフとした作品を展示した。昭和 20 年代後半から昭和 40 年頃まで、長崎には全国各地から多数の画家が訪れたが、画家たちが特に好んで画題としたモティーフのひとつが異国情緒豊かな長崎の街並みと、海のある風景であった。今回の展示では、野口彌太郎、鈴木信太郎、宮本三郎など、中央画壇で名を馳せた著名な画家たちの作品を紹介し、当時の長崎港が日本有数の名勝地、観光地として多くの人々に愛されていたことを再認識してもらう機会の創出をめざした。

展示では、昭和 40 年代以降、画家たちの愛した景観が経済成長の中で失われていき、その結果芸術家たちの来訪が少なくなったことも紹介した。海をめぐる観光文化の観点は、現在そしてこれからの未来においても重要な視点であるといえるだろう。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

コーナー②「長崎の菓子型」
海から運ばれ出島に荷揚げされた砂糖は、長崎に成熟した菓子文化を創出した。長崎を出発点とし、小倉までを結ぶ長崎街道沿いは、現在では「シュガーロード」と呼ばれている。今回展示した、長崎の菓子文化を彩る菓子型は、海の向こうからもたらされたモノ（砂糖）や文化（外国菓子の製法）が、地域に根付くなかで独自の発展を遂げた好例であり、様々なモノや文化をもたらし豊かな文化を形成するという海や港の本質的な機能・魅力について再発見してもらうことを目的とした。
　それぞれの菓子型には、同種の菓子型から生み出される菓子のイメージ写真及び製法の解説を記した解説キャプションを付し、豊かな海の恵みをイメージしてもらいつつ、菓子型それ自体の造形的な美しさにも注目してもらうよう意識した。

特集展示：島袋道浩　二度起こること：象が海からやってくる

■開催期間：2021 年７月 15 日（木）～2021 年９月 12 日（日）

■開催場所：長崎県美術館　常設展示室　第４室

■入場者数：　6,964　人

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

７月 14 日に実施した関連事業「島袋道浩　二度起こること：象が海からやってくる」は当初、多くの参加者を募集し、アートプロジェクトを体験してもらうことを計画していた。しかし、新型コロナウイルス感染が拡大するなかで、（1）実施予定日に開催できなくなる可能性があること、（2）参加者が多数となった場合に参加者の安全に最大限配慮する必要があること　から、実施日を非公開とし、会場である長崎水辺の森公園における通行者のみが参加できる形式へと変更した。７月 15 日からはじまった本展示は、実施日非公開としたことで失われてしまったアートプロジェクトの体験機会を補うためにおこなったもので、プロジェクトの様子を記録した映像作品に加え、島袋道浩氏が制作した象、島袋氏によるステートメントを展示した。（※詳細については下記「関連事業の様子」も参照のこと）

アートプロジェクトに実際に参加し、海のもつ文化的な機能やスペクタクルな魅力を現地で体感してもらうことが理想ではあったが、結果として通常通り実施していた場合と比較してもより多くの方々にプロジェクトを鑑賞いただくことができたことは喜ばしいものと言える。島袋氏が制作した象が小舟に乗って海上を走る様を映し出した映像と実際に使用した象を同時に展示することで、映像を見ただけではわかりづらいスケール感についてもイメージしてもらうことができたのではないかと考えられる。会場では島袋氏によるステートメントと解説を兼ねたご挨拶文を印刷したハンドアウトも配布した。

【来館者の声】

○絵に描けるようなきれいな海をずっと守りたいと感じた。

○四季や時代、戦争などいろいろな条件の中でも海は変わらず描かれ続けるものだと感じた。

○同じ長崎の海であっても、見る人、場所、時間帯で表情が変わって面白いと思った。

○長崎と海とは共になくてはならないものだと改めて感じた。

○長崎にしかない風景を大事にしていきたいし、もっと多くの人に見てもらいたいと思った。

2．関連事業の内容

■レクチャー：長崎港をめぐる物語ー美術の視点から

【開催日時】2021 年５月 23 日（日） ～ 2021 年６月 13 日（日）
【開催場所】長崎県美術館公式 Youtube での動画配信
【参加者数】動画再生回数：166 回
【実施内容・目的】

●担当学芸員が、展覧会の内容を分かりやすく解説する動画コンテンツを配信することで、作品鑑賞及び、本展覧会の趣旨について理解を深めてもらうための助けとする。

●新型コロナウイルス感染拡大に伴い、対面形式の講座が難しい状況の中で、オンラインを用いてより多くの方々に長崎港の魅力や機能を伝えることを目指した。

動画コンテンツ冒頭

解説画面

展覧会の内容に即して、見どころを分かりやすく解説することを重視した。動画コンテンツの内容としては、展示の前半にあたる「港のすがた」部分を重点的に紹介し、長崎港が近代以降、その役割を変化させながらも長崎の町の歩みにおいて重要な存在であり続けたことを、美術作品を紹介しながら解説した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■島袋道浩　二度起こること：象が海からやってくる

【開催日時】2021 年 7 月 14 日（水）11：00～16：00
【開催場所】長崎港湾内～長崎水辺の森公園運河
【参加者数】　（当日）約 30 人
【実施内容・目的】

●国際的に活躍する美術家・島袋道浩氏によるアートプロジェクト。江戸時代に象が海外から長崎港に運ばれ、その後江戸城まで歩いたという史実を島袋氏の視点から再現した。

●海を起点とする歴史的な物語をアーティストの視点から再現することで、参加者に対し、「常にモノ・コト・文化をもたらし、そこに新たな文化を創出する」という海の持つ文化的な機能を単に歴史的事実として学ぶというよりもより体感してもらうことを目指した。
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実施日非公開とし、当日居合わせた通行人等のみの参加となった。プロジェクトの様子は映像作品として展示室で公開した。

開催場所の全景の様子

会場・長崎水辺の森公園運河の様子

長崎県美術館は長崎水辺の森公園に隣接しており、公園内を走る運河は長崎港と接続しており、長崎県美術館の真下を通過する。このように長崎県美術館は海の傍らにある国内でも特殊な立地を持つ美術館であるが、これまで海上を舞台としたアートプロジェクトを実施したことはなく、今回がはじめての試みであった。本事業では、国内の様々な芸術祭をはじめ国際的に活躍するアーティスト・島袋道浩氏を招聘し、長崎港をめぐる史実を題材としたアートプロジェクトを実施した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

島袋氏がかつて作製した象を小舟に乗せ、およそ400年前に象が船に乗って長崎港に運ばれてきた歴史的な物語を島袋氏の視点から再現した。海の向こうから象が近づいてくるさまは、視覚的に大きなインパクトを与えるものであると同時に、かつてこの海に、象をはじめとする多種多様な「未知のモノ・コト・文化」が盛んにもたらされてきたことを想起させるものである。象の鳴き声が英語で「トランペット」であることをふまえつつ、小舟に乗った島袋氏がトランペットを時折吹き鳴らした。時に力強く、時に儚げに響くトランペットは、かつて象がやってきた日の光景に思いを馳せるきっかけとなった。

プロジェクト実施中には近隣の保育園の児童が偶然通りかかり、象の到着を迎えることとなった。象が美術館下の運河に入ってくると、アーティスト・野村誠が鍵盤ハーモニカによるにぎやかな音楽を演奏。これに島袋氏の吹くトランペットと子どもたちの歓声が加わり、美術館一帯が祝祭的なムードに包まれた。展覧会事業においては美術作品を通して海の美しさや海がもたらす恩恵といった部分を強調したが、本アートプロジェクトでは現代アートを通して長崎の海や港のもつダイナミックなおもしろさを感じてもらうことを目標とした。

【来館者の声】

◯長崎の海は歴史的にもおもしろいことがたくさんあるとわかった。

◯普段見慣れているはずの海が違うものにみえて面白かった。

◯江戸時代にやってきた象は、長崎の海がどんなふうに見えていたのか気になった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

【事業全体のまとめ】

本事業は、長崎港が開港して450周年の節目を迎えることを記念して実施した展覧会であったが、「海の学びミュージアムサポート」の支援を受けたことで、展覧会において他館および関係先から作品を借用したり、あるいは国内外で広く活躍するアーティスト、島袋道浩によるアートプロジェクトを実施できたりと、開港450周年の節目にふさわしい充実した事業とすることができた。絵画作品の鑑賞という、いわゆる美術館らしい体験はもちろん、実際に美術館とつながっている長崎港を舞台にしたアートプロジェクトを実施できた（※コロナウイルス感染拡大防止のため、アートプロジェクトの様子を記録した映像を展示室で上映）ことで、長崎の海の魅力について、単なる歴史的な事柄としてではなく、私たちが生きる現在、そしてこれからバトンを渡していく未来にも深く結びついていることを感じていただけるプログラムになったといえる。来場者からも、長崎の海や港がいかに長崎の歴史や文化にとって重要であるか再認識するきっかけになったという声もあった。当館はまさに長崎港に面する地に位置する美術館であるが、今回のようなテーマによる展覧会事業ははじめての試みであった。本事業によって得た経験やノウハウを今後の事業にも積極的に活かしていきたい。

3．主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1．長崎歴史文化博物館	作品貸与
2．長崎県菓子工業組合	作品貸与
3．十八親和銀行	作品貸与

4．主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1．NHK長崎放送（TV）	「長崎開港450年　絵画菓子づくりの木型　展示会」『イブニング長崎』4月7日
2．NIB長崎国際テレビ（TV）	「長崎開港450周年　歴史振り返る作品展」『NNNストレイトニュース』4月8日
3．長崎新聞	「開港450周年でコレクション展　長崎港テーマの絵画など」4月14日
4．朝日新聞	「長崎港　世界に開き450年」4月27日
5．毎日新聞	「港の風景画23点　非公開「菓子型」も　県美術館で記念展」4月30日
6．長崎ケーブルメディア（TV）	「長崎開港450周年記念　長崎港をめぐる物語」『なんでんカフェ』6月9日
4．NCC長崎文化放送（TV）	「再現　長崎開港450年　海から象がやってくる」『スーパーJチャンネル長崎』7月14日
5．KTNテレビ長崎（TV）	「海を渡り　かつて海外との窓口だった長崎に300年のときを超え…ある動物が！？」『マルっと！』7月14日
9．長崎新聞	「長崎港に「象」がやってきた」7月15日
10．西日本新聞	「超短波」7月15日

以上

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。